

日本語とモトゥ語の対照言語学的研究

——指小辞をめぐる——

岡村 徹

序論

指小辞 (diminutive) は、現代言語学辞典 (1988) によると、「名詞・形容詞・副詞などにつけて、「小さい」という概念を表わす接辞」(p. 169) と定義される。日本語で言えば、「小皿」・鍵っ子」・「太郎ちゃん」などの例を挙げることができる。いずれも下線部が付加されることによって「小ささ」や「かわいらしさ」を表している。

一方、オーストロネシア諸語の1つ、パプアニューギニアのモトゥ語は、「小ささ」を表すのに、重複という形態的手法を用いる。例は、*mereki* ‘皿’ / *mereki-mereki* ‘小皿’。これは形態論的には、部分重複法ではなく、全体重複法である。

本論文では、日本語の指小辞 /ko-/ やモトゥ語の重複化しうる語と重複化しえない語を、名詞句階層を援用して範疇化する。本題に入る前に、モトゥ語はどういう言語か、日本語とモトゥ語を比較対照させる意義は何かを述べておきたい。

モトゥ語は、約1万5千人の話者を有し、主に首都ポートモレスビー周辺で話されている。母音は5種類、子音は14種類ある。日本語と同じく開音節終わりの言語である。語順は日本語と同様 SOV である。通常、被修飾語が修飾語に前置する。日本語と同じく後置詞が存在する。両言語は、「小ささ」を表す形態的手法が互いに異なる。例えば、日本語は /ko-/ という接頭辞を使うが、モトゥ語は語基を重複させて表す。しかし、表面上は異なって見えても、「小ささ」を表す名詞の種類に関しては、それを名詞句階層上に示すと、その分布パターンが類似していることがわかる。これら日本語とモトゥ語の対照言語学的な研究から、人類言語の類型化の可能性を示唆したい。

次の第一節では指小辞をめぐる先行研究に触れ、問題点を浮き彫りにする。

1. 先行研究

皆島 (2003: 109) によると、日本語の指小辞「コ」は、3種類の形態素が存在する。それぞれ接頭辞としての「小-」「子-」と接尾辞としての「-子」である。そうすると、「小-」は「子-」とは異なる形態素であることになる。「小-」と「子-」を使った名詞がそれぞれ名詞句階層上どこに分布するのか注意が必要である。

また特定の地域方言を研究対象とした、阿部 (1999) や齊藤、意味論や認知言語学的な考察

をした、久保（2011）やテイラー／瀬戸（1999）、ヨーロッパの言語を対象とした、西村（2011）、日本語とヨーロッパの言語との対照言語学的な考察をした、皆島（2002、2003）らの研究がある。いずれも、日本語の指小辞のもつ規則性を明らかにする方向性がある。また外国語のそれとの比較を通して、関連性を追究している。

一方、Taylor（1970）は、モトゥ語の多岐にわたる重複現象について報告した。その結果、モトゥ語の重複法の形態的特徴として、部分重複法と全体重複法とがあり、語類としては動詞、名詞、形容詞、副詞が多く、文法的機能として、部分重複法には複数化の機能があり、全体重複法にはさまざまな機能が付随しているとした¹。さらに Capell（1937）を引用しながら、2音節以上の全体重複法はメラネシアのオーストロネシア諸語ではまれだが、メラネシアの非オーストロネシア諸語とモトゥ語では頻繁に起こるとした。つまり Capell はモトゥ語がインドネシア語の祖語の特徴を借用したと考えている。

モトゥ語の重複法は Capell（1937）によって、7つの文法的機能が存在すると報告されているが、Taylor（1970）はそれを検証している。その結果、Capell が報告したモトゥ語の重複法には生産的なものもあれば、そうでないものもあるとした。特に、強調、指小辞、名詞化（動詞から名詞）がモトゥ語の重複法の中核的な機能であると結論づけた。例えば強調の例として、goeva ‘clean’； goevagoeva ‘very clean’（Chatterton 1931：31）、複数化の例として、tau, ‘man’； tatau ‘men’（Chatterton 1931：27）がある。

岡村（1992）は、オセアニア地域で話されている諸言語の重複現象の中核的な機能として、強調、複数、配分、継続があると指摘した。この4つは世界中の多くの言語で観察される、重複現象の根幹的な機能であるとした。ニューギニアの接触言語であるトク・ピシンにもこれら4つの機能は受け継がれている（岡村 1992：119）。

さて、Taylor（1970）が指小辞の例として挙げているのは次の5つである。

- (1) mero, ‘boy’； meromero, ‘little boy’
- (2) mereki, ‘plate, dish (a borrowing)’； merekimereki, ‘small plate, dish’
- (3) memero, ‘boys’（<mero ‘boy’）； memeromemero, ‘little boys’
- (4) huala, ‘crocodile’； hualahuala, ‘small crocodile； sea-horse’
- (5) nadi, ‘stone’； nadinadi, ‘small stone； kidney’

Taylor（1970：1237）

mero ‘少年’は人間、huala ‘鱷’は動物を表わす名詞である。mereki ‘皿’は生産物／道具を表わし、nadi ‘石’は自然物を表わす名詞である。以上の指小辞がその形態的手法はどうかあれ、名詞句階層の援用が可能かどうか興味深いところである。

その前に、日本語とモトゥ語の「小ささ」を表す用例を次の第2節で観察する。

2. 日本語とモトゥ語の比較対照

ここでは、日本語の /ko-/ が具体的にどのような種類の名詞に接辞するか観察したい。

まず比喩的な意味を伴う場合が多い‘生物の部分’から見てみよう。‘小腹’の /ko-/ は接頭語であるが、‘腹’そのものが通常よりもあるいは他人のそれと比べて小さいことを意味するわけではない。例えば、‘小腹が減る’は、少しばかり腹がすくことを意味する。同様に、‘小耳’は‘耳’それ自体が通常よりもあるいは他人と比べて小さいということを意味しているわけではない。皆島（2003:117）によると、生物の部分を表す名詞は、「身体部分」の「一部分」を意味することが多いとある。‘小耳に挟む’では、発話の部分的な断片を聞くとともにしに聞いてしまうことを意味するわけであるから指小辞としての働きはない。他にも、‘小口’‘小首’‘小鼻’などがある。/ko-/ に後続する名詞は、2拍名詞が一番多い。次に3拍、そして4拍と続く。

一方、モトゥ語のそれは、重複化しない。

(6) bogana, ‘belly’; hitolo ‘to be a bit hungry’ (MI² 2013)

(7) taiana, ‘ear’; a kamonai, ‘to happen to hear’ (MI 2013)

(8) iaona, ‘neck’; kwaramu a hegiro, ‘to bend one’s head slightly on one side’ (MI 2013)

次に、形容詞や形容動詞を後続させることができる日本語の /ko-/ の用例を示す。皆島（2003:117）は、「形容詞」「形容動詞」は「小さい」「重要でない」「軽蔑」の意味を含むと述べている。

‘小柄’は、体つきが通常より小さい様子を表す。‘小器用’も器用ではあるけれども少しばかり手先がきくようすを表す。ただし、これらは名詞ではないので、名詞句の階層上に並べることができない。‘小暗い’（形）の /ko-/ は接頭語で、少し暗いことを意味する。‘小太り’は、名詞や形動動詞としての用法がある。意味的には少し太っている様を言う。

人間名詞とは相性が良い。‘小男’は、ふつうより背たけの低い男性のことであり、‘小兵’は、体が小さい人のことを指す。他にも‘小女’‘小人’‘小娘’‘小者’‘小童’などがある。皆島（2003:117）は、接頭辞 /ko-/ に後続する語句の意味が「人間」や「動物」の場合、接頭辞 /ko-/ としての意味は「若い」「小さい」を意味するという。たしかに‘小人’や‘小鳥’はその好例であろう。

一方、モトゥ語は重複法によって、‘小ささ’を表す。例えば、下記の例文（10）と（11）。

(9) kekeni, ‘girl’; kekeni-kekeni, ‘little girl’ Chatterton (1931: 27)

(10) memero, ‘boys’; memero-memero, ‘little boys’ (再掲)

(11) tau, ‘man’; tau-tau, ‘small man’ (再掲)

生産物や道具を表す名詞とも相性が良いようである。形状的なものとの関係があるかもしれない。‘小皿’は、生産物であり小さな皿のことである。他にも‘小太鼓’‘小鼓’‘小筒’などがある。‘小刀’は、道具名詞であり、小さな刀のことをいう。他にも、‘小道具’‘小箱’‘小袋’‘小荷物’などがある。一方、モトウ語は下記の(12)～(14)にあるように、重複法によって、‘小ささ’を表す。

(12) mereki, ‘plate’; mereki-mereki, ‘small plate’ (再掲)

(13) mauwa, ‘box, case’; mauwa-mauwa, ‘small box’ (MI 2013)

(14) kiapa, ‘bag’; kiapa-kiapa, ‘small bag’ (MI 2013)

植物名詞は、しばしば文法的には無生物名詞扱いとされるが、階層のうえではどのような分布を見せるか注意しないといけない。例としては、‘小枝’‘小松’などがある。植物名詞も例外ではない。いわゆる上位語と下位語の関係において、双方に重複化が可能である。例は、(15) flaua ‘花’と(16) siale ‘ハイビスカス’。

(15) flaua, ‘flower’; flaua-flaua, ‘small flower’ (MI 2013)

(16) siale, ‘hibiscus’; siale-siale, ‘small hibiscus’ (MI 2013)

自然物を表す名詞は、‘小道’‘小島’‘小石’などがあり、その出現頻度も高い。自然物を表す名詞においても重複化は可能である。

(17) motu, ‘island’; motu motu, ‘small island’ (MI 2013)

(18) nadi, ‘stone’; nadi-nadi, ‘small stone’ Lawes (1979: 121)

自然現象を表す名詞には、‘小聲’‘小雨’‘小潮’‘小雪’などがある。かなり高い確率で対義語が存在する。例えば、大声／小聲、大雨／小雨、大潮／小潮、大雪／小雪など。

自然現象を表す名詞もモトウ語では重複化が可能である。

(19) medu, ‘rain’; medu-medu, ‘light rain’ (MI 2013)

皆島（2003: 117）は、「無生物」「自然現象」を表す名詞は「小さい」を、意味すると述べている。

抽象名詞においても、/ko-/ の接辞は可能である。例は、‘小急ぎ’ ‘小走り’（動作／作用）、‘小利口’ ‘小太り’ ‘小生意気’（性質） ‘小話’ ‘小歌’（言語作品） ‘小幅’ ‘小人数’（数量） ‘小半年’ ‘小半日’（時間） ‘小暗がり’ ‘小陰’（空間）など。皆島（2003）は、「その数量数値にはわずかに及ばないけれども、もう少しでその数値に届く、あるいはほぼその数値に近い、すなわち「近似値」という意味を表す」（p. 116）と述べている。

親族名詞には、/ko-/ が接辞しない。代わりに、「-ちゃん」が接辞する。例は、‘父ちゃん’ ‘母ちゃん’ ‘兄ちゃん’。いずれも、「かわいらしさ」「愛着」「親しみ」のようなものを表わす。ただし ‘弟ちゃん’ ‘妹ちゃん’ とは言えない。固有名詞についても同じ事が言える。例は、‘太郎ちゃん’ ‘花子ちゃん’。関西方言の ‘あめちゃん’ は、生物以外の名詞で「-ちゃん」が後接するという意味において、希少な例かもしれない。また、‘姪っ子’ ‘おばあちゃん子’ のように親族名詞に後接する形態素もある。

モトウ語は、ちょうど日本語で /ko-/ が接辞しないように、重複化しない。代わりに /-gu/ が名詞に接辞する。例は、父と母。

(19) tamana, ‘father’; tamagu, ‘daddy’ (MI 2013)

(20) sinana, ‘mother’; sinagu, ‘mommy’ (MI 2013)

動物名詞は、‘小鳥’ ‘小魚’ ‘子犬’ ‘子豚’ ‘小鳩’ などがある。これらのうち、‘小犬’ は小さい種類の犬のことであり、‘子犬’ とは意味が異なる。通常、上位語と下位語の関係においては、上位語のほうに「小-」が付きやすい。例えば、‘小鳥’。「鳥」の下位語として、‘カラス’、‘鳩’、‘雀’、‘燕’ などがあるが、‘小鳩’ を除いて、「小-」が接辞しにくい。‘小魚’ も同様である。「魚」の下位語として、‘鮪’ ‘秋刀魚’ ‘鰺’ ‘鯛’ ‘鯛’ などがあるが、一部を除いて「小-」が接辞しにくい。ここで大事ななのは、文化語彙という考え方である。日本人は、古来から魚を獲って暮らしてきた。当然これらに関係する語彙には種類があり、細かい区別を行っている。例えばある種の魚は、その成長段階に応じて、名称が変わる。しかし、/ko-/ の接辞は、基本的に上位語のみに作用するようである。

動物名詞はモトウ語でも幅広く重複化が可能である。

(21) manu, ‘bird’; manu-manu, ‘small bird’ (MI 2013)

(22) manu, ‘pigeon’; manu-manu, ‘small pigeon’ (MI 2013)

(23) manu, ‘bird of paradise’; manu-manu, ‘small bird of paradise’ (MI 2013)

- (24) boroma, ‘pig’; boroma-boroma, ‘small pig’ (MI 2013)
- (25) sisia, ‘dog’; sisia-sisia, ‘small dog’ (MI 2013)
- (26) huala, ‘crocodile’; huala-huala, ‘small crocodile’ (再掲)
- (27) gwarume, ‘fish’; gwarume-gwarume, ‘small fish’ (MI 2013)

一般に、ピジン語において重複が起こるのは、同音異義語を減らすため、単純形の意味を拡大するため、強調として使われるためである（トッド 1986: 106）。接触の初期の段階では、強調のほかに継続や反復の機能も生れる（トッド 1986: 38）。この三つの機能が、重複現象の根幹をなしていると言えるかもしれない。実際、世界の言語でも、これら三つの機能は幅広く観察されるし、それ以外の文法的機能（例えば自動詞化、名詞化など）となると、その出現頻度が下がる。モトゥ語の場合、これら三つの機能に加え、様々な文法性を有する機能が加わる。モトゥ語の文法体系の中核的な部分を占めていると言ってよいだろう。

桜井（2015）の重複語（原文では疊語）に関する観察で興味深いものがある。同一の語を反復させる現象は早い時期に観察されるとし、「日本人は、語を二つ重ねると中国語になると考えていた」（p. 422）とし、さらに日本人がその中国語を話すのを聞いて、「…中国人の側では、日本語とは語を重ねるものだと理解した」（p. 423）とし、それぞれにその証左となる資料を挙げている。これは日本人と中国人の双方が誤解したことで成立した表現であるとしている。やがてそれが慣習化され、社会的に機能したとする。接触の初期の段階ではよくあることであろう。しかし、これも強調という機能と無縁ではないと思われる。特に接触の初期の段階では、互いにコミュニケーションの術を持ち合わせていない。それでも何とか、相手との意思疎通を可能にしようとする。同じ語句を一度述べても、相手に理解されなかったり、聞き取られなかったりする。そこで、その語句を繰り返すことによって、相手に伝わる確実性が高まる。

地名には、「小ー」ではなく、「ー子」が接辞する。例えば、「小倉っ子」「神戸っ子」。たしかに指小辞ではあるが、上記の「小ー」とは異なる形態素である。また「小京都」「リトル東京」のように地名に前接する形態素もあるが、やはりこれらは今まで観察してきた /ko-/ と同じではない。したがって階層上、同列に扱うことはできない。「ー子」の分析は皆島（2003: 112）も述べているように、それが接辞する前は「ー人」という意味素性を有するが、いったんそれが接辞すると、「+人」の意味素性を獲得する。さらにモトゥ語の分布は日本語とどのような点で異なるのか、あるいは共通しているのか見極めなければならない。

それでは次の第3節で、これまで観察した名詞の種類が階層上どのように表されるか個別に観察していきたい。

3. 名詞句階層との関連

Silverstein (1976) は、名詞句階層を提案し、「この階層は動作者になりやすさの度合、動作の対象になりやすさの度合を現す」(角田 1991: 39) とした。シルヴァステイン著／小山編 (2009) は、「コンテキストで生起する社会文化的コミュニケーションの原理に基づいて、様々な名詞句が階層化されたものであると捉えている (一部省略)」(p. 16)。また、一人称代名詞や二人称代名詞など、階層の高いところにある代名詞は、メタ語用的透明性が高く、他方、抽象名詞など階層の低いところにある名詞句は、メタ語用的透明性が低いとされる (p. 27)。

この階層は多くの文法現象に反映している。例えば主格対格標示、人称代名詞の所有格形、受身可能性、定冠詞などの限定性のマーカーに反映している。詳細は上記シルヴァステイン (2009: 100-101, 105-106) を参照のこと。

3.1. 日本語の指小辞と名詞句階層

この階層上に、これまで観察してきた日本語の指小辞が反映しているかどうか検討していきたい。

まず日本語の /ko-/ (小-) は、階層の比較的高いところ、すなわち、親族名詞、人間名詞、動物名詞などの生物名詞はもちろん、生産物／道具、自然物、自然現象を表す無生物名詞とも相性が良い。階層の低いところにある抽象名詞 (動作／作用、性質、言語作品、数量、時間、空間) においても /ko-/ の接辞が可能なことから、かなり幅広い分布を見せることがわかる。階層の一番高いところと低いところ、すなわち、代名詞と地名には接辞しない。また親族名詞と同じ位置にある固有名詞にも付かない。

次に、/ko-/ (子-) はどうであろうか。これは先にも述べたように、/ko-/ (小-) とは異なる形態素である。なぜならば、「子宝」にあるように、「子-」は独立形態素であるが、/ko-/ (小-) は拘束形態素である。つまり形態的・統語的な区別があるので、形態素の種類が異なるのである。ところで、「-子」は階層の一番低い地名と共起することが可能である。例は、「江戸っ子」など。/ko-/ (子-) は、人間名詞、動物名詞、植物名詞、抽象名詞などと共起する。例は、「子連れ」、「子豚」、「子芋」、「子会社」、「子宝」、「子煩惱」、「子見出し」など。階層の高い代名詞と低い地名とは共起しない。

次の表 1 をご覧いただきたい。日本語の指小辞 /ko-/ (小-) が接辞する範囲は、階層上、どこからどこまでか見てみたい。ただし Silverstein の階層にある、無生物名詞に関して、「自然の力の名詞」「抽象名詞」「地名」の他に、具体名詞の「自然物」と「生産物／道具」を階層上に示している。また、モトウ語において、「小ささ」を表す際に、重複化しうる名詞の範囲は階層上のどこからどこまでであろうか。

両言語とも階層の中央部分が、小ささを表す際に、何らかの形態的手法を用いていることが

わかる。中央部分とは、すなわち、「人間」「動物」「自然の力」「自然物」「生産物／道具」を表す名詞である。また、両端になると、やはり両言語とも形態論的には疎遠になる。そして、「親族」と「抽象」名詞になると、両言語にばらつきがでる。‘小ささ’を表す形態的手法が両言語で異なるものの、何らかの形態的表示を行うという点においては、その階層上の分布が両言語で共通する。

日本語は、[+人間]、[+動物]、[+自然の力]、[+自然物]、[+生産物／道具]、[+抽象]、[+親族]といった文法範疇の束を有し、他方、モトゥ語は、[+人間]、[+動物]、[+自然の力]、[+自然物]、[+生産物／道具]といった文法範疇から成っている。したがって、日本語とモトゥ語は、[親族]と[抽象]の範疇によって区別される。

表1 名詞句階層上における日本語の指小辞 /ko-/ の接辞とモトゥ語の重複現象の有無

	1	2	3	親族	固有	人間	動物	自然 の力	自然物	生産物 ／道具	抽象	地名
日本語	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	-
モトゥ語	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-

3.2. 意味素性との関連

次に、意味素性という考え方を援用して、両言語の無生物名詞を観察してみたい。

まず、‘銃’は、「生産物」を表す名詞だが、それ自体に力があり、かつ、人間が操作できるものである。したがって、[+制御][+力]という意味素性を付与できる。

次に、‘雨’は、自然の力を表す名詞で、それ自体に力があるが、人間が操作できないものである。したがって、[-制御][+力]という意味素性を付与できる。

三つ目に、‘石’は、「自然物」を表す名詞で、それ自体に力がなく、また、人間が操作できるものでもない。したがって、[-制御][-力]という意味素性を付与できる。

最後に、‘刀’は、「道具」を表す名詞で、それ自体に力はないが、人間が操作できるものである。したがって、[+制御][-力]という意味素性を付与できる。

日本語もモトゥ語も、特定の意味素性を有するパターンと強く結びついているわけではないことがわかる。

3.3. 分離（不）可能所有物名詞との関連

一般に分離不可能所有物とされる身体部位や属性になると、接辞化されにくい。‘小口’や‘小鼻’は本論文で扱っている意味と異なる。/ko-/の接辞がマイナスのイメージを伴うため、例えば身体部位を表す名詞と相性がよくないとも考えられる。一方、分離可能所有物とされる、「衣類」「親族」「愛玩動物」「作品」「その他の所有物」になると、接辞化されやすくなる。

これらの名詞は、心理的な身近さという点においては前者ほどその値は高くないので、/ko-/の接辞も活発になると考えられる。例は、「鳩」、「鳥」「話」「皿」、「刀」。

崎山（1992）によると、モトウ語の名詞どうしでは、修飾語が被修飾語に前置されるが、その際：

モトウ語身体部位、i 身体部位、身体の属性、親族には、被修飾語に、単数で-na、複数で-dia が接尾される。それ以外では、修飾語と被修飾語との間に、ii 食べ物では、a-na（単数）、a-dia（複数）、iii それ以外のものでは、e-na（単数）、e-dia（複数）がおかれる。

- 1 mero sina-na 「少年の母」
- 2 memero a-dia tohu 「少年たちのサトウキビ」
- 3 haodataudia e-dia rege 「獵師たち（＝魚捕る haoda 人 tau）の網」崎山（1992：462）

であると言う。これはモトウ語話者の世界観を映し出しており、そうした中で小ささを表す重複化の有無もその世界観に基づいて出し入れされていると思われる。

次の第4節では、諸外国語の例を観察しながら、指小辞の性質を一般化できるか検討してみたい。

4. 諸外国語の場合

諸外国語の例を調べる際、文法書や辞書を活用するのがこの場合手取り早いのが、形容詞の説明はあっても指小辞の説明のある文法書はほとんどない。辞書については、例えばタイ語なら日タイ、タイ日辞典を引くことによって比較的容易に用例を採取できるが、念のためインフォーマントにも質問をしておくほうが良いであろう。

4.1. 諸外国語の実例

英語の場合、‘小さい’を意味する形容詞が後続する名詞を修飾する形で表現される。例えば、‘小男’は、a little man；an undersized man, ‘小鳥’は a small bird；a little bird, ‘小雨’は a light rain；a drizzle；a mizzle。

上記の方法を取らず、元の名詞の語形とは全く異なる語を当て、表現することも可能なものもある。例は ‘小石’ a pebble, ‘小皿’ a saucer, a plate, a dish。しかし a saucer は、a small dish とも言える（用例は『New 斎藤和英辞典』を参照）。

ところで英語には ‘鳥’ bird；‘小鳥さん’ [幼] birdie のように接尾辞-ie を使って「小ささ」や「かわいらしさ」を表すことが可能である。

この指小辞が付く範囲を特定してみよう。まず親族名詞は可能である。例は daddy ‘父ちゃ

ん’、mommy ‘母ちゃん’。次に固有名詞も可能である。例は Sussie ‘スーザン’、Litie ‘リトバルスキー’。人間名詞や動物名詞も可能である。例はそれぞれ、Aussie ‘オーストラリア人’、doggy ‘ワンちゃん’。自然の力を表す名詞として、ハリケーンの名前を挙げよう。例は Bonnie, Virginie など。自然物を表す名詞の場合は、今のところ適当な例が見あたらない。Rockies は ‘ロッキー山脈’ という意味の他に、MLB のチーム ‘ロッキーズ’ があり、愛称としての意味がないわけではない。いずれにしても自然の力と自然物を表す名詞において、指小辞-ie は生産的ではない。生産物／道具を表す名詞の一つに、bike がある。これはしばしば bikies ‘バイク軍団’ と表現され、可能である。

どの言語でもそうかもしれないが、指小辞化すると、慣用句を作りにくくなる。例えば、‘鳥も鳴かずば撃たれまい’ と言うが、‘*小鳥も鳴かずば撃たれまい’ とは言わない。他の多くの動物名詞でも同様の傾向がある。

次にドイツ語を見てみよう。ドイツ語も英語と同じ型である。例えば、‘小男’ は ein kleiner Mann -es, ‘小鳥’ は ein Vogelchen -s; ein [kleiner] Vogel -s, ‘小雨’ は ein leichter Regen, ‘小石’ は der Kiesel -s; das Steinchen -s, ‘小皿’ は ein kleiner Teller -s; das Tellerchen -s。

フランス語も ‘小男’ petit homme (‘男’ homme), ‘小鳥’ [petit] oiseau (x) (‘鳥’ oiseau (x)), ‘小雨’ petite pluie (‘雨’ pluie), ‘小石’ [petit] caillou (x) (‘石’ caillou (x)), ‘小皿’ petite assiette, ‘皿’ assiette となり、英語やドイツ語と同じ型である (用例は『スタンダード和佛辞典』を参照)。なおフランス語では、‘小箱’ petite boîte, ‘男の子’ petit garçon, ‘小さな通り’ petite rue のように、いずれにおいても petit (e) を使う (用例は『現代フランス語辞典』を参照) が、日本語ならば、それぞれ /ko-/、/-ko/, Adj. +N と形態的・音韻的な区別がある。petit のように日常的に使用頻度が高く、短い語形を有する形容詞の場合、名詞に前置する。愛称としての ‘～ちゃん’ は、単に相手の名前を呼び捨てにするか、あるいはその縮約した形であったり、渾名を使うことが多いようである。

ドイツ語の場合、kleiner Vogel というと、鳥の大小について言及することになるが、Vogelchen というと、かわいらしさ、愛らしさの意味が加わる。-chen が接辞しているので、形態的に見分けることが容易である。-chen は中性名詞を作る縮小語尾である。ほかにも Fraulein ‘令嬢’ の -lein がある。(ドイツ語の用例は『現代和独辞典』を参照)。

英語の pebble ‘小石’ は ‘石ころ’ という意味合いがある。ドイツ語と同じような意味特徴があると言える。ただ英語はドイツ語のように形態的一貫性がない。

韓国語もこの型に入る。‘小さい’ を意味する形容詞を名詞に前置させる。小鳥はチャグンセ、小男、小石、小皿も形容詞 ‘チャグン’ を名詞に前置させる。韓国語では小さい鳥も小鳥もチャグンセとなり、日本語のように形態的な区別をしない (ただし ‘小雨’ の場合、このチャグンが付かない) (用例は『日韓辞典』を参照)。

また日本語の‘～ちゃん’に相当するものとして、帝塚山学院大学の任氏（私信）によると、母音で終わる名前（例えば‘Taro’）には、‘ya’を後接させて親しみを表す。また子音で終わる名前（例えば‘John’）には、‘a’を後続させる（ただしこの場合は、名前と a との間に半角空けるのが普通のようなのである）。

インドネシア語もこの型に入る。ただし修飾語が後置され語順は異なる。例は、‘小男’ pria kecil（‘男’ laki-laki）, ‘小鳥’ burung kecil（‘鳥’ burung）, ‘小雨’ hujan rintik-rintik（‘雨’ hujan）, ‘小石’ batu kecil, kerikil（‘石’ batu）, ‘小皿’ piring kecil,（‘皿’ piring）となる。いずれの例も kecil ‘小さい’が前にある被修飾語にかかっている（用例は『日本語インドネシア語大辞典』を参照）。

中国語は、xiao ‘小さい’という形容詞を被修飾語に前置接続させる。例は、

‘小男’ xiǎogēzi（‘男’ nande）, ‘小鳥’ xiǎoniǎo（‘鳥’ niao）, ‘小雨’ xiǎoyǔ（‘雨’ yǔ）, ‘小石’ xiǎo shízi（‘石’ shítou）, ‘小皿’ xiǎodǎnzi（‘皿’ dǎnzi）。この場合の xiao は形容詞的なのか、接頭辞的なのか。どちらも結果として名詞句を形成している。日本語では、‘小型バス’、‘小資本’、‘子ども’における下線部は音韻的・形態的に区別されるが、中国語ではそれぞれ xiaoba、xiaoben、xiaohair となり区別が生じない。なお、中国語にも Xiao という愛称を表す要素がある。この場合は接頭辞的で、「姓、子供の名前、動物の名前の前に用いて親しみを込めて呼ぶ場合に用いる」（用例は『白水社中国語辞典』, 『中日大辞典』(p. 1595)。例は小王 = 王君、王さん、小平 = ピンちゃんなど（前掲）。この要素は、後続する名前の音節の長さとも関係してくるが、よほど親しい間柄でないと使用されないようである（例は XiaoLee）。

タイ語はこれまで取り上げた言語と比べて、その形態的手法がかなり異なる。例は ‘小男’ phuuchaai tua lek-lek,（‘男’ phuuchaay, chaai）。

‘鳥’ nok は ‘小鳥’ nok khanaat lek となる（khanaat ‘サイズ’）。‘小さい鳥’は nok tua lek-lek（tua ‘体’）。大阪大学の宮本マラシー氏（私信）によると、noktua**lek** は例えば檻の中に大きい鳥と小さい鳥がいて、大きいほうの鳥ではなく、小さいほうの鳥をさす場合に使い、noktua**leklek** は、一般に小さい鳥のことを指すと言う。語基と lek の間に類別詞 tua が挿入されるが、この類別詞 tua は省略することも可能である。

‘皿’ caan は、‘小皿’ caanleklek となる。

‘雨’ fon は ‘小雨’ fontokprooi となる。これは雨がしとしと降る、という意味のことで、日本語の ‘小雨’ にぴったり合うタイ語はない。‘小粒の雨’であれば、fon met lek-lek（met ‘粒状のものの類別詞’）といい、leklek を用いる（宮本 私信）。

‘小石’ koonkruat（‘石’ hin; koonhin）も同様である（用例は『日タイ辞典』を参照）。koonkruat は砂利のことで、‘小石’は、hin koon lek-lek（koon 塊状のものの類別詞）といい、leklek が付く。

日本語の‘～ちゃん’と1対1の対応をなす要素はタイ語にはないが、大阪大学の宮本マラシー氏によると、有名なスポーツ選手や俳優たちを愛称で呼ぶことはある。タイ人は例外なく、みんな、本名とは別に、生まれた時から愛称をもっていて、愛称で呼び合うことがあたりまえである³。

これまで扱ってきた諸外国語の形態的手法を一般化すると、下記の表1のようになる。‘小ささ’や‘かわいらしさ’を表すのに、重複法を用いるモトウ語は異彩を放っているようにも見える。しかし、ハワイ語などオーストロネシア系の言語では珍しくはない(岡村 1992)。ハワイ語では、同じ種類の魚でも成長段階に応じて、その名称が変わる。そのときに重複法を用いる。

日本語は、固定的な接頭辞を接辞する方法を用いる。英語やドイツ語も接尾辞を使って‘小ささ’や‘かわいらしさ’を表すが、日本語におけるような固定性はない。スワヒリ語は、日本語に近い接頭辞 *ki-* を有する。例は、‘小鳥’ *kidege* (‘鳥’ *ndege*)、‘小石’ *kijiwe* (‘石’ *jiwe*)、‘小皿’ *kisahani* (‘皿’ *sahani*)。しかも‘小さいこども’ *mtoto mdogo*、‘小さい人’ *mtu mdogo*、‘年下の兄弟’ *ndugu mdogo*、‘小さい物’ *kitu kidogodogo* のように形容詞を後置させる手法も有する。(用例は『スワヒリ語常用 6000 語』『簡明スワヒリ語 日本語辞典』『スワヒリ日本語辞典』を参照)。接辞化と重複化を同一言語内に有する事例はない。一見すると、相補分布をなしているようにも見える。

そして最後に、重複法も接辞法も採用しなくて、単に形容詞を前(後)置させて、‘小ささ’や‘かわいらしさ’を表す言語がある。その中にはその手法に加えて、さらに接辞化や重複化をさせる言語もある(日本語やモトウ語)。

こうして見ると、韓国語や中国語のように形容詞前(後)置型と、日本語やモトウ語のような接辞・重複型の大きく二つに分類できるかもしれない。要するに形容詞を前(後)置させる以外にも形態的手法があるか否かというレベルでの分類である。さらに付言すると、これまで、語族の不明な言語(日本語や韓国語)、インドヨーロッパ語族(英語、ドイツ語、フランス語)、シナ・チベット語族(中国語、ニジェール・コンゴ語族(スワヒリ語)、オーストロネシア語族(モトウ語、ハワイ語)といったように語族を超えて指小辞を観察してきたが、大きく二つに分類できるのは興味深い。

表2 諸外国語の指小辞

言語	形容詞前（後）置	接辞化	重複化
日本語	+	+	—
スワヒリ語	+	+	—
韓国語	+	—	—
モトゥ語	+	—	+
英語	+	+ ?	—
ドイツ語	+	+ ?	—
フランス語	+	—	—
中国語	+	—	—
タイ語	+	—	+ ?

次の4.2. では、基礎語彙と重複法の関係を考察する。

4.2. 基礎語彙との関係

基礎語彙の定義は今日でも必ずしも明確ではないが、1) 使われる頻度数が多い、2) 日常生活に欠かせない、3) 6、7歳頃の児童ならば誰でも知っている、4) 世界中どのような言語にも存在する、5) 借用によって変化しにくい、とある（言語学大辞典 p. 271）。ニューギニアでは、さつまいも *kaukau* タロイモ *taro* ヤムイモ *yam* がよく食事に出される。つまり多くの部族にとって主食である。しかしスワデシュによる基礎語彙200項目（前掲 p. 270）には上記の語彙は含まれていない。モトゥ族にとっては、これらは日常生活の中で、よく使われる語彙であり、年齢の低い子どもたちもよく知っているので、充分、基礎語彙としての資格を有する。

日本語はスワデシュの90の名詞のうち、20の語彙で、/ko-/ が可能である（石、雨、男など）。その他、/ko-/（子）が1（犬）、/shoo/（小）が3（根、葉、花）、基礎語彙そのものに /ko-/（子）が付随しているものが1（子ども）あり、これらはいずれも、それが小さいことを指しており、全部で25ある。これは全体の約28%の含有率である。モトゥ語にも同様の傾向があり、基礎語彙は指小辞化しやすいものを多く含むと言える。

意味素性と基礎語彙との関連では、それ自体に力はなく、かつ、人間がコントロールできるものではない、つまり、[－力] [－制御] の性質を有する名詞（雨、石、道、雪）が一定数ある。次に、それ自体に力はないが、人間がコントロールできるものがある（頭、耳、口、足、膝、首）。これらはいわゆる身体部位である。ただしここで気をつけないといけないのは、例えば‘小首’は小ささを表しているわけではなく、そういう点において最初に取り上げた名詞類と異なる。ここでは単に /ko-/（小）の接辞化の有無を指摘しているだけである。意味素性は、[－力] [+制御] と表せる。

最後に、それ自体に力はあるが、人間はコントロールできないものがある（魚、鳥、しら

み)。意味素性は、[+力] [−制御] と表せる。

このようにして見てみると、3.2. で観察したように接頭辞化 /ko-/ できる名詞は、特定の意味素性と結び付いてはいないことがわかる。

一般にオーストロネシア系の言語では下記の 1 番から 15 番までにあるように、語形が類似している。文化的な特徴として、犬、豚、鶏といった家畜を飼っていること、ココヤシ、砂糖黍など有用植物が暮らしにあること、カヌーなどを操る海洋民族の歴史を有するなどの共通点がある。

一方、パプア系（非オーストロネシア系）の言語になると、16 番から 21 番に見られるように雑多な様相を呈してくる。もっともパプア諸語と言っても、オーストロネシアの諸言語のように一つの語族として確立されたものではない。しかしながらオーストロネシア系と同じく、犬、豚、鶏といった家畜は重要である。主食としては肥沃な土地を生かして、ヤムイモ、タロイモ、サツマイモなどを栽培する。

5 番のトライ語と 6 番のヒリモトウ語はどちらもニューギニアで話されているオーストロネシア系の言語であるが、語順が異なる。前者は SVO 型、後者は SOV 型である。また同じニューギニア国内で話されている言語であっても、16 番のヤガリア語のように高地で話されている言語になると、さらに複雑な様相を呈する。

表 3 イモを表す語彙

	ヤムイモ	タロイモ	サツマイモ
1 マダガスカル語	uvi	-	vumanga
2 タガログ語	ubi	gabi	kamote
3 ヤミ語	ovi	-	wakay
4 インドネシア語	ubi	keladi	ubi jalar
5 トライ語	up	pa	kaukau
6 ヒリモトウ語	maho	talo	kaema
7 フィジー語	uvi	dalo	kumala
8 パーミーズ語	ouh, auh	-	kumalen
9 クワイオ語	kai	gou	kuma
10 ハワイ語	uhi	kalo	uala, uwala
11 サモア語	ufi	talo	umala
12 タヒチ語	ufi	taro	umara
13 トンガ語	ufi	talo	kumala
14 マオリ語	uhi	pehu	kumara
15 ラバスイ語	uhi	-	kumara
16 ヤガリア語	hago	yana, yatave	ba
17 ベナベナ語	abi	ama	maya maya
18 スデスト語	puttee	viya, uthu	tuu, rairu
19 ワルサ語	ehwimb	sava	wemb
20 ダディビ語	kali	o	mama kali
21 マナンブー語	nan, kamkaw	sakibag	kapayawi

モトゥ族の主要な作物はヤムイモとバナナである (Chatterton 1964:4)。ヤムイモはモトゥ語で *maho* と表す。Lawes ほか (1979:142) によると、ヤムイモの種類は次に示すように数多くある。

agavaita, alo, ulo, badukalo, bagara, batu, bubui, divoi, gata, gete, heiga, kabukabu, kahugo, ke-maiore, koki, kokorogu, korua, lovai, madina, makota, maloa, manonoha, minagoru, papakadebu, taitu, tavea。モトゥ語でヤムイモは小ささを表すのに重複法は用いない。種類に応じて、個別に語彙が存在する。

この種類の多さは、パプア諸語でも同様である。例えば、ヤガリア語では、ヤムイモのことを *hago* と表現するが、以下に示すように数多くの種類がある。*alava, amena, binavana, bipana, dalu, demopa, fanuna, fono, gaboke, gamopa, gaotuna, gule, hale, lolovale, solake*。

当該民族の文化の中核的な語彙になればなるほど、別個の語彙として具体的に存在する。よく取り上げられる有名な例として、日本語のコメ、イネ、モミ、ライス、ごはんがある。これらは英語では *rice* として表現される。日本語のほうが細かい区別をしているが、日本が農耕文化圏であることを示す好例である。また日本語では雄牛、雌牛、子牛のように複合語化するが、牧畜文化圏では *cow, ox, heifer* のようにそれぞれ別個の語彙として存在する。

お わ り に

以上、日本語とモトゥ語の指小辞の比較対照によって、いくつかのことが明らかになった。

まず、名詞句階層の高いところから、低いところに向かって、日本語ならば接頭辞化が、モトゥ語ならば重複化が低減していくというわけではなく、むしろ、階層の中央部分にその現象が生産的になることがわかった。これはつまり、階層は反映していないが、むしろそれが強く現れる分布において共通点が見られるということである。

もっと正確に言うならば、日本語は、[+人間]、[+動物]、[+自然の力]、[+自然物]、[+生産物／道具]、[+抽象]、[+親族] といった文法範疇の束を有し、他方、モトゥ語は、[+人間]、[+動物]、[+自然の力]、[+自然物]、[+生産物／道具] といった文法範疇から成っている。したがって、日本語とモトゥ語は、[親族] と [抽象] の範疇によって区別される。

次に、諸外国語の指小辞と比較すると、日本語やモトゥ語の性質は、決して特殊ではないものの、その形態的な手法においては、多数派の世界に位置付けられるものではないことがわかった。

スワデシュによる基礎語彙 200 項目 (前掲 p. 270) のうち、およそ 90 が名詞類である。そのうち、20 の語彙で、接頭辞化 /ko-/ が可能である。これは全体の約 28% の含有率である。モトゥ語にも同様の傾向があり、基礎語彙は指小辞化しやすいものを多く含むと言える。

意味素性と基礎語彙との関連では、接頭辞化 /ko-/ できる名詞は、特定の意味素性と結び付いてはいないことがわかった。

注

- 1 動詞化、名詞化、意味の低下、繰り返し、継続、複数主語と動詞の一致、指小辞、拡大辞、集合体、色彩形容詞の形成、複数化、強調、力の低下、等価文における名詞と形容詞の一致、複数形的一致など、詳しくは Taylor (1970) を参照のこと。
- 2 諸外国語の例は、帝塚山学院大学や大阪大学の教員および留学生にご教示いただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。
- 3 さらに宮本氏によると、個人的に知っている人たちに対しては、「nong+名前または nick name」や「nuu+名前または nick name」のような呼び方もあるという。Nong 年下の兄弟（姉、弟）、nuu ‘ネズミ’。「Nong+名前または nick name」は基本的に相手は年下であり、話者との間の年齢がそんなに離れていない場合に使われる。「Nuu+名前または nick name」は基本的に、年配の人が若い人または小さい子どもに対して使うことばである。人を呼ぶときに使い、動物や物に対しては使わないのがふつうである。しかし、最近 nong maa ‘わんちゃん’ (maa ‘犬’) がよく聞かれる。以前は犬を番犬として飼っていたが、最近、番犬ではなく、ペットとして飼っている人が増えてきたのにつれてこういった呼び方がされるようになったと思われる。今のところ、他の動物の場合は「nong～」で呼ぶことを聞いたことはない。（以上、宮本氏にご教示いただいた）。

参考文献

- 阿部貴人 (1999) 「指小辞 /-ko/ に関する意味記述－青森県津軽地方・弘前方言を例に－」『阪大社会言語学研究ノート』 OUKA, pp. 16-24.
- 岡村徹 (1992) 「オセアニア諸語と重複」『大阪女学院短期大学紀要』第 23 号 pp. 109-120.
- 崎山理 (1992) 「モトウ語」『言語学大辞典 第 4 巻世界言語編 (下-2)』東京：三省堂
- 亀井孝ほか (1995) 『言語学大辞典 第 6 巻術語編』東京：三省堂
- 桜井隆 (2015) 『戦時下のピジン中国語－「協和語」「兵隊支那語」など－』東京：三元社
- シルヴァステイン, M. 著／小山亘編 (2009) 『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡』東京：三元社
- 田中春美編集主幹 (1988) 『現代言語学辞典』東京：成美堂
- 齊藤泉実「那覇方言の指小辞「グワー」の意味・用法」pp. 147-159.
hougen.sakura.ne.jp/hidaka/okinawa/2006/3_17.pdf 2013 年 10 月 30 日取得
- 久保圭 (2011) 「日本語の接頭辞『小』と『薄』について－価値判断の観点から－」, 日本認知科学会 第 28 回大会, 東京大学, 2011 年 9 月 25 日. (日本認知科学会 第 28 回大会発表論文集 pp. 763-766)
- テイラー, J. R.／瀬戸賢一 (1999) 『認知文法のエッセンス』東京：大修館書店
- Taylor, A. J. (1970) Reduplication in Motu. *Pacific linguistics*. C-13 pp. 1235-1245.
- 西村君代 (2011) 「イベリア半島における縮小辞について－スペインを中心に－」Sophia-R, pp. 81-92.
- 皆島博 (2003) 「日本語の指小辞「コ」について－エウェ語との対照－」『一般言語学論叢』pp. 107-132.
- 皆島博 (2002) 「エウェ語の-vi と日本語の「コ」」『福井大学教育地域科学部紀要 I (人文科学 外国語・外国文学編)』58, pp. 9-23.
- Chatterton, Reverend P. (1964) *Peoples of the Pacific: The Motuans*. Melbourne: Eilke & CO. LTD.
- Chatterton, Percy. (ed) *A Grammar of the Motu Language of Papua*. Wholly set up and printed in Australia by a. h. pettifer, government printer Sydney, New South Wales.
- Lawes, W. G. and D. D. F. R. G. S. with introduction by the Rev. George Pratt. (1979) *Grammar and Vocabulary of Language Spoken by Motu Tribe*. New York: AMS Press Lister-Turner, R and Clark, J. B. (1931), *A Dictionary of the Motu Language of Papua*, 2nd Edition (P. Chatterton, ed). Sydney, New South Wales: Government Printer.

Lister-Turner, R and Clark, J. B. (1931), *A Grammar of the Motu Language of Papua*, 2nd Edition (P. Chatterton, ed). Sydney, New South Wales : Government Printer.

参考にした辞典類：

日外アソシエーツ辞書編集部 (1999) 『New 斎藤和英辞典』 発売元：株式会社紀伊国屋書店
小西友七／南出康世編 (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 大修館書店
シンチンゲル R.／山本明／南原実編 (1990) 『現代和独辞典』 三修社
安田吉実、孫洛範編 (1994) 『日韓辞典 改訂新版』 民衆書林
末永晃編 (2001) 『日本語インドネシア語大辞典』 大学書林
愛知大学中日大辞典編集所編 (2010) 『中日大辞典 第三版』 大修館書店
松山納著 (1999) 『日タイ辞典 改訂増補版』 大学書林
鈴木信太郎監修 (1970) 『スタンダード和佛辞典』 大修館書店
中條屋進ほか編集 (1997) 『現代フランス語辞典 [第2版]』 白水社
守野庸雄／中島久編 (1992) 『スワヒリ語常用 6000 語』 大学書林
宇野みどり編 (2009) 『スワヒリ語－日本語辞典』 国際語学社
和崎洋一編 (1980) 『スワヒリ－日本語辞典』 美徳社